

学会創立20周年記念特集

雑 感

中川照眞

1988年5月に中国合肥市で開かれた第3回日中合同分析化学シンポジウムに出席した際に、小学校3年の夏に日本に引き揚げて以来40年ぶりに中国の地を踏んだ。シンポジウムの後で、生まれ故郷の大連市を訪れ、故波多野博行先生のご紹介で大連化学物理研究所を訪れて盧佩章所長や張玉奎教授にお会いした。その当時、研究所は都心部の旧満州鉄道会社の煉瓦造りの建物を使っていたが、その後、郊外の新しい敷地に移動し立派な建物になった。私の通っていた学校（大連日僑学校）や生家もそのまま残っていた。（生家は後に取り壊された。）それがきっかけで、京都大学を停年退職するまでほぼ毎年張教授にお会いし、中国に行った折には必ず大連を訪れて親交を重ね、家族ぐるみの付き合いが続いている。昨年12月に京都で開かれた HPLC Kyoto 2008 の折に久しぶりにお会いし旧交を温めた。

一方、2000～2001年の2年間、本会の第6期会長を勤めたが、この間に本会及び中国クロマトグラフィー学会の主催で日中合同分離科学シンポジウムを開くことができた。第1回

は2000年7月26～28日に中国大連市で開催され、日中合わせて28件の講演が行われた（写真）。第2回は2001年12月23～24日に京都で開催され23件の発表があった。このシンポジウムでは講演時間を30分としたため、一般公募による発表を受けられなかった。そのために講演をお断りしたケースもあったのは誠に残念であった。また本誌と「色譜」誌（Chinese Journal of Chromatography）との間で論文の相互掲載を行った。ご承知のように中国は近年著しく経済発展をとげ、それに伴って研究者数も論文数も急激に増えている。クロマトグラフィーの分野でも、例えば上記の「色譜」誌の最近号（27巻第2号）の掲載論文数は24報ある。量より質だと言う意見もあるが、私が審査している他の雑誌では確かに中国からの投稿論文のリジェクト率は（他国からのものに比べて）高いように思う。本学会と本誌のさらなる発展を期待している。

私は今年70歳になるが、現役時代に比べて書斎で仕事をする時間が長くなり、その分かえって視野が広がったように思う。ボケないうちになるべく多くの仕事をしたい。

